

専門家というもの

昨今、新聞、テレビで「専門家」という言葉を見ない日は無い。しかし、事あるごとに専門家が登場するようになったのは、せいぜいこの20年のことである。これは世の中が高度化し、一般の人にはそれが到底理解できないため、自分で一定程度でも考えることをせずに専門家に任せるといふ風潮のためであると思われる。また、行政にとってもマスコミにとってもそれが免罪符であったりする。

しかし、私自身もいろいろな委員会やテレビ等で専門家としてよばれるが、テレビであれば、あらかじめ用意されたディレクターの放送シナリオに沿った言葉を捉えて、関係の無いところでこの発言を利用されたり、委員会であればあらかじめ用意された結論に都合の良い発言を期待されたりもする。そして専門家の真意が十分汲まれないまま報道されたり、事が運んだりすることが少なくないのである。これは極めて危険な風潮であると言わなければならない。とりわけこの度の震災では、専門家により安全と判断されたことになっている原発が大事故を起こし、専門家の適切な助言によって作成されたとされるハザードマップのために多くの犠牲者が出た。そして、事後、それらは当然の帰結であったことが別の専門家によって指摘されているのである。

それでは専門家とはどういう人を指すのであろうか。私の講義中に余談として話した専門家の定義について述べてみよう。

まず、専門家とは「その分野の事柄について分からないとは言えない人」である。高校までの勉強では、教えられたことだけが、分からなければならないことであり、試験の出題範囲も習ったことだけに限定される。従って、習っていないことは堂々と「分からない」と言うことができる。しかし、その専門を修めた人間というものは、それを教えられようと教えられまいと、関連した基礎的な事項は分かっているといえなければならないし、分からない場合は自分の力で調べ、理解できるのでなければならない。そういう意味で「分からないとは言えない人」である。

次に、専門家とは「その分野の事柄について分からないと言える人」でもある。第一線の研究とは未知の領域への挑戦である。従って、分からないことがあるのは当然である。ただ、専門外の人と大きく異なるのは、分かっている事と分からない事の境をきちんと知っているということである。だからこそ、「それは分からない」と堂々と言えるのである。

また、専門家は「その分野の事柄について恐れぬ人」でもある。よく我々は、自分の知らない用語や概念が出てくると、それがいくら単純なものであっても、そこで思考が止まってしまい、その中身をブラックボックス化してしまう。従って、その専門領域にまで踏み込んで物事を考えられなくなる。これに対して専門家は、自分の専門分野の用語や概念は知っているであろうし、たとえ十分知らないことでも、それを理解し、踏み込んで考えることができるので怖くはない。その意味で、専門家は「分からないなりに分かることができる人」でもある。

もう一つ、専門家には重大な側面がある。それは「自分の専門領域以外の事は知らない人」であることである。現在、各専門分野は細分化し、先端化、高度化している。従って、その先端分野に関する十分な能力と知識がありさえすれば、他の分野について知らなくとも、また関心が無くとも十分にやっていけるのである。同じ学科の隣の研究室でやっていることが全く分からなかったり、学会の同じ分科会での研究発表がお互いに分からなかったりするのはごく普通である。専門分野がますます細分化し、先端化し、また、社会的コミュニケーションが失われている今日にあって、この自分の専門領域以外の事や世の中の事を知らなかったり、関心が無かったりする人間の割合は急速に拡大している。

今世の中にはありとあらゆる専門家がおり、必要に応じてそれらの専門家をよんで意見を聴けば

事足りると思っている人が多いと思われる。しかし、実際は、個々の専門家はまばらなブラシの毛の一本一本のようなもので、その先端をつないでいけば、物事の全てが網羅されるものではない。毛と毛の間には、埋めることのできない深い谷間があるのである。そして、そのようにしてよばれた専門家が、自分自身の専門から少しはずれたことを問われたとき、「分からないと言えない人」であるが故に、わかったような顔をして不確かな事を発言し、「その分野の事柄について恐れない人」であるが故に、専門用語を多用して人々をけむにまき、「自分の専門領域の事しか知らない人」であるが故に、自分の責任が発生しそうな場面になると、自分の専門ではないと言って逃げるのである。そして、専門家をよんだ側は、真実や科学的事実をよそに、それらの発言を都合よく利用し、専門家は被害者であると同時に加害者にもなってしまうのである。

世で思う専門家と内側から見る専門家では、これだけの隔たりがあるものである。専門家を活用する社会も、社会に利用される専門家も、そして専門家を育てる教育機関も、このことは十分肝に銘じておくべきことと思う。